

# 伝統文化 「狂言」に親しむ

6月12日(土)、めぐろパーシモンホール小ホールにて万作の会・石田幸雄氏ほか2名を講師に招き、所作体験と鑑賞を含む、狂言の入門講座が開かれました。



講師 石田 幸雄氏 重要無形文化財総合指定者



内藤 連氏が演じる「太郎冠者」 岡 聡史氏が演じる「主」



鐘の音の鐘を突く所作と鐘の擬音を体験しました。感染予防のため、着席のまま行いました。両手を左右にふり、「えい、えい、えい」と鐘を突く動作をし、鐘

## 「鐘の音」と狂言 小舞「兎」を体験

## この辺りの ものでござる

演者が黙って、橋掛りを進んできます。本舞台に入り正面を向き前進、そして止まると一歩下がってから、「このあたりのものでござる」と発声します。多くの狂言がこの独特の自己紹介から始まります。狂言は、橋掛りと三間(約5.5メートル)四方の舞台で練り広げられる、演者の声と身体だけであらゆる物事を表現する古典芸能です。能も同じ舞台で行われます。狂言と能は「舞台が親として」、性格が違う兄弟みたいなものです。能は謡と舞で、物語にあるような悲劇、恋愛にまつわる苦悩といったものが演じられます。狂言



太郎冠者(たろうかじゃ)の装束を着ける実演をいただきました。まるで楽屋に居るようです。



所作体験 客席にて えい、えい、えい (鐘を突く動作)

の音を「じゃ〜ん、もん、もん、もん、も〜ん」と声で表現します。参加者の皆さんは、最初は恥ずかしくていましたが、だんだんと乗ってきて、良いビブラートがかかるようになりました。その後「兎」を皆で舞いました。

小舞「兎(うさぎ)」  
あ(ん)の山から こ(ん)の山へ  
跳んできたるは何じやるる  
頭(かしら)に二つ ふつぷつと  
細うて 長うて  
ぴんど跳ねたを  
ちゃつと推した  
兎ちゃ



装束付けとその構成などを解説いただきました。

## 狂言「鐘の音」の 鑑賞

岡聡史氏、内藤連氏により狂言「鐘の音」が演じられました。

は、人間の弱さや欲を、日常やバカバカしい出来事を題材に、様式的に演じる台詞劇です。音が欲しいときは、演者が声で擬音を出します。余計なことは一切しない、肝心な表現だけを演じてみせるのが狂言です。また、演者が「目黒を出発した」と言ってから、舞台上を一回りし「いや、何かといううちに札幌に着いた」と言う、もうそこは札幌なのです。そして舞台を一回りするとまた目黒に戻ってくることもできます。観客は想像し感じ取り、一体感で舞台を作っていくことができます。慣れば慣れるほど癖になる、楽しくなるのが狂言です。

所作とともに謡うのですが、そこに感情を入れた、狂言の「心」を体験しました。狂言の深さと面白さを知ることができました。今回の講演会最後に笑いの所作をしました。「まず、まず、まず、わーはっ、はっ、はー」と。なぜだかすきっとほのぼのとした気持ちになりました。今の暗い世の中に、明るい日が差したようなひと時を過ごすことができました。石田幸雄講師、万作の会の皆さんに改めてお礼申し上げます。



所作体験 ずか、ずか、ずか (のこぎりで垣根を切る様子)



鐘の音の上演

主人は息子の元服に、黄金作りの太刀を差させてやろうと考え、金の値段を聞きに太郎冠者を鎌倉へ遣わします。ところが、「金の値」を、寺の「鐘の音」と思い込んだ太郎冠者。寺々を回って帰宅すると、主人の前で鐘の音を説明するのだが……というのがあらすじです。寿福寺・円覚寺・極楽寺・建長寺の寺々の鐘の音を擬音で説明したり、主人の怒りを解くため、鐘の音の子細を謡い舞ったりするのが見どころの狂言です。演者自身の声で鐘の音を表現する、狂言独自の趣向をライブならではの迫力と感動で堪能しました。

次回以降も伝統芸能・狂言や舞台芸術などで皆様に喜ばれるような企画をしてみたいです。

※本文の一部について、講演会当日に使用した石田幸雄講師監修のレジュメから引用しています。



所作体験 わーはっ、はっ、はー